

平成23年度病害虫発生予報 第5号(8月予報)

平成23年8月1日
和歌山県

< 予報の概要 >

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	いもち病	紀北：並 紀中：並 紀南：やや多		ミナキイロアサミウマ ミカンキイロアサミウマ ハスモンヨトウ シロイチモジヨトウ	並 やや少 並 並
	紋枯病 縞葉枯病 ニカメイガ ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ イチモンジセセリ コブノメイガ 斑点米カメムシ類	並 並 やや少 並 少 並 並 やや少 並	カンキツ	黒点病 かしよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアサミウマ ゴマダラカミキリ	並 多 並 並 並 並
			カキ	炭そ病 うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 フジコナカイガラムシ	並 並 やや多 並 並
野菜	疫病 モザイク病 アブラムシ類 ハダニ類	並 並 並 並	果樹全般	カメムシ類	並

気象予報

1か月予報（予報期間 7月24日～8月23日 大阪管区气象台）

< 予想される向こう向こう1か月の天候 >

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%） >



凡例: 低い(少ない) 平年並 高い(多い)

		月平均気温 (平年値) (℃)	月降水量 (平年値) (mm)
8	月	和歌山 28.1	和歌山 86
		潮岬 26.7	潮岬 233

I. 水 稲

1. いもち病

- (1) 予報内容 発生量 紀北・紀中地域：並 紀南地域：やや多
- (2) 予報の根拠
- ① 7月中旬の紀南地域の早期水稲では、葉いもちの発病株率は18.0%（平年12.4%）に比べ、やや高かった。
 - ② 7月中旬の紀北・紀中地域の普通期水稲では、葉いもちの発病株率は0%（平年5.2%）と平年に比べ低かった。
 - ③ BLASTAMによると、紀中地域（清水）、紀南地域（龍神）のアメダス地点において7月21日～22日に2日間の連続した感染好適日が観測された。
 - ④ 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 穂ばらみ期防除を重点とし、葉いもちの多発ほ場では穂ぞろい期の追加防除を行う。
 - ② 常発地では次年度から罹病性品種の作付を避ける。

2. 紋枯病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 7月中旬の紀南地域の早期水稲では、紋枯病の発病株率は0%（平年4.0%）であった。
 - ② 7月中旬の紀北・紀中地域の普通期水稲では、紋枯病の発病株率は0%（平年0.8%）であった。
 - ③ 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 幼穂期に発病株率5%以上のほ場では、穂ばらみ期に薬剤散布を行う。
 - ② 出穂後も上位葉への進展がみられる場合には追加散布を行う。

3. 縞葉枯病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 7月中旬の定点ほ場における発病株率は紀北地域で0%（平年0.1%）、紀中地域で0.6%（平年0.0%）、紀南地域で0%（平年0.0%）であった。
 - ② 7月中旬の臨時調査では、紀北地域の発生株率は0.4%、紀中地域の発病株率は0.8%であった。
 - ③ ヒメトビウンカの8月の発生量はやや少ないと予想される。

4. ニカメイガ 第2世代（紀北・紀中地域）

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 7月中旬の25株あたり被害茎数は、紀北地域0（平年0.0）、紀中地域0（平年0.0）であった。
 - ② 4月から7月4半旬まで、フェロモントラップ（紀の川市）では誘殺されていない（平年0.4頭）。
 - ③ 近年、発生が極めて少ない。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 第1世代幼虫による心枯茎を認めたほ場では、第1世代成虫の予想発蛾最盛期（平年8月3半旬頃）から1週間までの間に防除を行う。

5. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり発生密度は、紀南地域は2.7頭（平成6.3頭）、紀北・紀中地域は3.7頭（平成9.8頭）と平成に比べやや少なかった。
- ② 予察灯による7月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市8頭（平成11.0頭）、上富田町0頭（平成0.9頭）、那智勝浦町0頭（平成1.3頭）である。

6. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり発生密度は、紀南地域は1.2頭（平成8.4頭）、紀北・紀中地域は3.3頭（平成7.9頭）であった。
- ② 予察灯による7月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市1頭（平成3.5頭）、上富田町11頭（平成4.5頭）、那智勝浦町280頭（平成90.5頭）である。

7. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり発生密度は、紀南地域0.7頭（平成54.5頭）、紀北・紀中地域3.3頭（平成87.2頭）と平成に比べ少なかった。
- ② 予察灯による6月から7月4半旬までの誘殺数は、紀の川市35頭（平成236頭）、上富田町0頭（平成339頭）、那智勝浦町2頭（平成339頭）と平成に比べ少い。

8. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり発生密度は、紀南地域0頭（平成0.3頭）、紀北・紀中地域0頭（平成0.4頭）であった。
- ② 予察灯による6月から7月4半旬までの誘殺数は、紀の川市0頭（平成1.6頭）、上富田町0頭（平成0.9頭）、那智勝浦町1頭（平成2.0頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月中旬の発生に注意し、株あたり成幼虫4～5頭の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。

9. イチモンジセセリ(イネツトムシ)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたりツト数は、紀南地域0（平成0.1）、紀北・紀中地域0（平成0.1）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月上旬の発生に注意し、若齢期の防除に重点を置く。

10. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり上位2葉の被害は、紀南地域は0.2葉（平成8.5葉）、紀北・紀中地域は0葉（平成2.4葉）と平成と比べやや少なかった。
- ② 蛍光灯誘殺箱（紀の川市）による6月から7月4半旬までの誘殺数は、0頭（平成5.0頭）であった。なお、平成の初誘殺期は7月2半旬である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 飛来時期から、第1世代の発蛾最盛期は7月5～6半旬頃と推定される。
- ② 防除適期は、粒剤の場合は第1世代の発蛾最盛期、その他の薬剤（乳剤、水溶剤、フロアブル等）の場合は第2世代幼虫発生時期（第1世代の発蛾最盛期の7日後）である。
- ③ 幼穂形成期後、出穂期頃までに上位2葉の被害葉率が40%になると10%程度減収する。それ以降の被害は被害葉率80%以上でも収量・品質に及ぼす影響は小さいので、紀南地域の早期水稻では防除の必要性は低い。

11. 斑点米カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の紀南地域の本田では、捕虫網20回振りによる捕獲虫数が9.8頭（平年11.8頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 出穂の早い作型で、周辺に雑草が繁茂していると被害を受けやすい。
- ② 雑草地のイネ科雑草が発生源となる。本田への成虫の飛来を防ぐためには、出穂10日前までには場周辺を除草する。
- ③ 出穂後、本田内でホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシなどの飛来を認めたら、乳熟期（出穂10日後）から糊熟期（出穂20日後）にスミチオン剤、MR.ジョーカーEWなどの薬剤を散布する。カスミカメムシ類の発生が多い場合は穂ぞろい期（出穂3日後）にも薬剤散布する（「防除指針」参照）。

II. 野 菜

1. 疫病（トマト、キュウリ）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 日高地域の露地栽培ミニトマト、トマトにおける発生ほ場率は7月5半旬現在、0%（過去3年間の平均0%）であった。
- ② 日高地域の露地栽培キュウリにおける発生ほ場率は7月5半旬現在、0%（過去3年間の平均0%）であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 排水を良くし、株元に滞水しないようにする。

2. モザイク病（トマト、キュウリ）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 日高地域の露地栽培ミニトマト、トマトにおける発生ほ場率は7月5半旬現在、0%（過去3年間の平均0%）であった。
- ② 日高地域の露地栽培キュウリにおける発生ほ場率は7月5半旬現在、0%（過去3年間の平均0%）であった。
- ③ 8月のアブラムシ類の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① アブラムシ類の防除を徹底する。

3. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは7月5半旬現在、モモアカアブラムシの発生ほ場率0%（平成3.7%）、寄生葉率0%（平成0.1%）、ワタアブラムシの発生ほ場率13%（平成4.9%）、寄生葉率0.6%（平成0.3%）であった。
- ② 7月の黄色水盤（紀の川市）への飛来数は、4半旬現在14頭（平成33.0頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 同一薬剤の連用を避ける。

4. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは7月5半旬現在、ナミハダニは発生ほ場率25%（平成12%）、寄生葉率1.3%（平成1.4%）、カンザワハダニは発生ほ場率25%（平成28%）、寄生葉率9.4%（平成7.1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性が発達している事例が多い。同一薬剤の連用を避け、タイプの異なる複数の殺ダニ剤を交互散布する。

5. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは7月5半旬現在、発生ほ場率25%（平成25%）、発生葉率2.5%（平成4.9%）と平成並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ナスでは、選別時に被害果実を認めたら防除を始める。
- ② 施設では、栽培終了後7～10日間ハウスの蒸し込みを行い、その後残さを処理し、後作の発生源にならないようにする。

6. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは7月5半旬現在、発生ほ場率0%（平成8%）、発生葉率0%（平成1.7%）と平成に比べやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生の多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。
- ② 施設では栽培終了後7～10日間ハウスの蒸し込みを行い、その後残さを処理し、後作の発生源にならないようにする。

7. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは7月5半旬現在、発生ほ場率13%（平成3.5%）、発生葉率0.6%（平成0.2%）とやや多かった。
- ② フェロモントラップによる7月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市0頭（平成44.4頭）、和歌山市130頭、御坊市153頭（平成173頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 中・老齢期になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢幼虫期（網目状の被害葉がみられたとき）の防除を心がける。
- ② 抑制エンドウでは、ウイルス病、鳥害や防風対策を兼ねて、は種後40～50日間寒冷紗被覆を行うと被害が軽減される。

8. シロイチモジヨトウ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① フェロモントラップによる7月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市4頭（平成10.9頭）、御坊市174頭（平成87.5頭）である。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① ハスモンヨトウに準ずる。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除）における7月中旬の発病度は22.4（平成18.0）と平成よりやや高かったが、防除区の発病度は0.2（平成1.0）と平成よりやや低かった。
 - ② 7月中旬の巡回調査における発病果率は、紀中地域（有田・日高）は0.6%・5.8%（平成3.8%・18.6%）と、平成に比べやや低かったが、紀南地域（西牟婁）は17.2%（平成19.0%）と、平成並であった。
 - ③ 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 後期感染防止のため、8月中下旬の防除を徹底する。
 - ② 枯枝や剪定枝の除去を徹底する。
 - ③ 7月の累積降水量（7月26日まで）が、紀中・紀南地域で約300～380mmを観測し、前回散布後約250mmに達した園は速やかに散布する。

2. かいよう病

- (1) 予報内容 果実発生量 多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除）における7月中旬の発病葉率は47.7%（平成23.1%）と平成より高かった。
 - ② 7月中旬の巡回調査によると、発病園率は30%（平成30%）と平成並であったが、6月の調査時（23%）と比べてやや増加した。
 - ③ 7月19～20日の台風6号接近により、最大風速で川辺14.2m/s、南紀白浜22.9m/sの強風雨が観測された。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 防風対策に努め、台風等で強風雨が予想される場合には、事前に銅水和剤（炭酸カルシウム剤200倍加用）を散布する。
 - ② 夏秋梢の病斑は、翌春の主要な伝染源になるので剪除および薬剤防除に努める。幼木、高接樹ではミカンハモグリガの防除を徹底する。
 - ③ 平成23年度発生予察注意報第3号及び防除技術情報第1号を参照する。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除）における7月中旬の発生量は平成より少なかった。
 - ② 7月中旬の巡回調査における発生園率は30%（前年30%、平成38%）で平成並であった。寄生葉率は11.7%（前年4.8%、平成9.8%）、100葉あたり雌成虫数は45頭（前年11頭、平成45頭）といずれも平成並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一薬剤を年間に2回以上使用しないことが重要である。

4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生時期 第2世代2令幼虫最盛期 8月4半旬(平年並)
発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場(無防除)での第1世代成虫の初発時期はやや遅かった。
② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生園では、8月中旬に散布むらのないように葉裏まで、ていねいに散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場(無防除)における7月中旬の発生量はやや多かった。
② 7月中旬の巡回調査によると、発生園率は13%(前年17%、平年16%)と平年並であった。
③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 寄生果率が15%以上または100果あたり15頭以上に達すると防除する。
② 発生園およびイヌマキやサンゴジュの隣接園では防除を徹底する。

6. ゴマダラカミキリ

(1) 予報内容 産卵量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場(無防除)、各地域における初発の時期はやや遅く、発生量は平年並であった。また、7月の成虫の発生量は平年並であった。
② 発生源となる放任園や管理不良園が増加している。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 成虫の捕殺に努め、放任園周辺など発生が多い園では株元散布を行う。

<カ キ>

1. 炭そ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の巡回調査園における「富有」の発病果率は0%(平年0.0%)と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病枝や果実が見られる場合は剪除し、夕立や秋雨が続いたり、台風が通過したときには追加防除を行う。
② 密植園の風通しの悪い場所は発病しやすくなるので、園内の通風・採光をはかり、薬剤をかかりやすくする。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の巡回調査園における「富有」の発病葉率は11.2%(平年12.1%)と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏をねらって丁寧に散布する。
- ② 盛夏期には孢子形成を一時休止するが、8月下旬頃から秋雨前線が停滞すると感染が再開されるので、防除が必要である。

3. 円星落葉病、角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 円星落葉病 やや多 角斑落葉病 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の巡回調査園においては発病葉は認められなかった。
- ② 昨年10月の巡回調査園の「富有」における円星落葉病の発病葉率は7.0% (平年1.5%) と平年よりやや多く、角斑落葉病の発病葉率は20.8% (平年21.8%) と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 本病は樹勢が低下すると発病が助長される。
- ② 角斑落葉病は二次伝染を繰り返すので、多発園では発病後も防除を励行する。

4. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の巡回調査園における「富有」の寄生果率は11.2% (平年13.3%)、「平核無」・「刀根早生」の寄生果率は0.9% (平年2.7%) と平年並であった。

(3) 防除上注意すべき諸点

- ① 8月上旬中旬が1齢幼虫の発生時期にあたり、防除適期である。
- ② 薬剤が果実に十分かかるよう茎葉の混み合いをなくし、丁寧に散布する。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察灯における新成虫の誘殺数は、紀南地域では5月上旬以降、紀北地域では6月上旬以降、平年並に推移した。
- ② 7月中旬の巡回調査園におけるカキの被害果は、「富有」・「刀根早生」・「平核無」ともにみられなかった。
- ③ ヒノキ花粉飛散数比 (本年/前年) は7.2であり、カメムシの発生量に対して餌となる球果の量が多くなると考えられるため、果樹園への飛来は少ないと考えられる。

(3) 防除上注意すべき諸点

- ① 今後山林隣接のカキ園を中心とした果樹園への飛来に注意し、飛来や被害のみられる場合には、速やかに薬剤散布を行う。
- ② 台風の通過後に一時的に多くなることがあるので注意する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ホームページ <農作物病虫害防除所コーナー>

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所 (TEL 0736-64-2300)までお願いします。